坂東舞台に小説 家族の絆描く

「ありがとう大賞」の北林雨夏さん

昨年創設された公募小説賞「ありがとう大賞」で第1回大賞を受賞した坂東市の脚本家、北林雨夏さんの小説「金色の笑顔」がPHP研究所から出版された。東日本大震災以降の支援や絆、改めて気づいた感謝の思い「ありがとう」の意味を考えるきっかけにと始まった同賞。北林さんが茨城を舞台にした作品への思いを聞いた。（田中千裕）

出版された「金色の笑顔」を手にする北林雨夏さん＝坂東市辺田の自宅

東京都生まれの北林さんは小学生のとき、両親の故郷・岩井市（現坂東市）に家族で転居した。都内の大学に通っていた一時期を除き、市内で生活。この作品も、都内の事務所と行き来しながら同市辺田の実家で執筆した。

「金色の笑顔」は、不登校予備軍の女子高生、小麦が、がんを患った祖父からの〝お願い事〟をきっかけに、さまざまな出会いと気づきを得ていく物語。

小麦が学校をサボるお気に入りの場所は自宅前の江川。窓から望む筑波山や、祖父がスイカ畑で乾いた土に水をまく光景などは、小学生時代の北林さんが祖父母の畑仕事を手伝った昭和60年代、盛夏の描写だ。

3世代同居率が日本一という同市。家族を大事にする土地柄で、北林さんも祖父母の近くで暮らし、家族に看取られる祖母の姿に、作品テーマの「家族」のありようを肌で感じてきた。

だからこそ「家族の絆を作品にするなら地元茨城を舞台にしたい」と、かつての生活感が風景描写となって作品に散りばめられた。

10年前からドラマ脚本家として「夜逃げ屋本舗2」（日本テレビ）など約20作品を手がける一方、「終末医療」をテーマに5年間、取材を続けたドキュメント作品もある北林さん。

小説のエピローグで祖父の死を自宅で迎える描写には、実際の祖母の看取りに加え、「終末医療」の取材で在宅看取りの現場にも身を置いた経験が生かされている。

北林さんの原動力は現場で得た「元気は人からもらい、人に与えること」。今後の執筆にも「社会的なテーマを取り上げながら、温かみのあるものを書きたい」と意欲を見せた。